舵を切る

～四賢婦人・矢嶋楫子の生涯～

文＝福永無想

第五回「直明の遺言」

世の中は、大きく変わろうとしていた。鶴子が亡くなったひと月後の嘉永6（1853）年、アメリカの使節マシュー・ペリー率いる艦隊が浦賀沖に現れ、開国を求めた。その翌年、幕府は再来したペリーを通じて「日米和親条約」を結ぶ。これにより日本の鎖国は終わりを告げる。そして、激動の幕末の時代が幕を開けようとしていた。

■

「そろそろ、お前も嫁ばもらわんとな。私もいつまでん、元気でいるわけではなかし、そろそろよか年じゃ…」

直明は長男の源助を書斎に呼び、気弱な胸の内を吐いた。愛妻の死から一年。片時も離れず、献身的に支えてくれた鶴子を亡くしたことは、直明にとって悲しみに耐え難いものであった。

源助は鶴子の一周忌が終わると、堀糸子という女性を妻にめとった。父は熊本藩家老・長岡監物（ながおかけんもつ）（※）の家臣で、糸子は監物の妻の元で行儀見習いとして仕えていた。

「こんなよか嫁がきてくれて、私も安心じゃ…。糸子さん、矢嶋家ば頼みます。ごっほん、ごっほん…」

この頃の直明は咳き込むことも多くなり、床に伏しがちになっていた。

「父さま、今朝は卵のおかゆをお持ちしました。お加減はどがんですか？」

勝子は日に日に食が細くなっている直明の体を案じて、少しでも精のつくものをと、いろいろと工夫を凝らして膳をこしらえた。

「お勝か…」

寝床から体を起こして直明は、卵がゆを口にしながらしみじみと昔を振り返った。

「お勝、実はな、私は、お前が産まれた時、どうか息子であって欲しいと願ったものだった。次男の五次郎を亡くしてから、わが家はなぜか男児に恵まれんでなぁ」

勝子は黙って、直明の言葉に耳を傾ける。

「幼かったお前が、誰よりも先に種痘の注射ば受けると手を上げたり、小楠先生の話をふすま越しに聞いたりする姿を見て思ったことがある。これが男だったら、もっと別の広い世界を見ることができただろうに、とな」

直明は、胸のつかえを下ろすかのように冗舌に言葉を続けた。

「お勝、進む道が違うと思ったならば、迷わずに別の道を行け。お前には、どんなことも乗り越えていく強い信念がある。きっと母さまも、同じことば言うたはずだ」

そう言って直明は、もう一口、卵がゆをすすった。浴衣の袖からすっかりと細くなった腕がのぞく。勝子は、この直明という大きな屋根の下で、心安らかに生きてきたこれまでのことを思う。そして、そう遠くない日に、切ない別れが来ることも感じていた。

「父さま、ならば、これから息子になりましょうぞ。その辺りの男よか度胸はございます。色黒でこの性格、どうせ嫁のもらい手もなかことでしょうし」と勝子は口を尖らせておどけてみせた。

「お前って子は…」と、直明は大きく肩をゆすって笑った。そしてそれが、勝子が直明と二人きりで交わした最後の会話となったのだった。

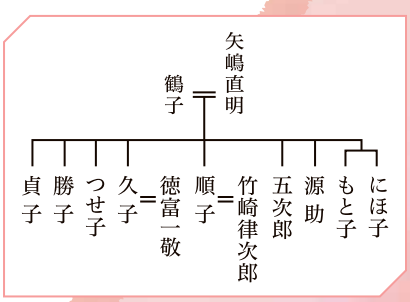
■

妻・鶴子の死から2年後の安政2（1855）年、直明は幕末の世の推移を案じつつ、現役の惣庄屋のまま62歳の生涯を閉じた。

直明が中山手永（てなが）で成し遂げた偉業は数知れなかった。その功績をたたえ、現在の美里町の岩野地区では、今も矢嶋家の働きに感謝する「矢嶋祭」が行われている。

※長岡監物／熊本藩家老。藩政改革派の中心人物で、保守派との抗争に敗れ家老を辞職。その後、黒船来航により、再び熊本藩の浦賀警備隊長として登用され現地に赴いた。

※この物語は、矢嶋楫子の資料をもとに描いたフィクションです



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250　電話/286-4959
開館/9時30分～16時30分　休館/月曜（祝日の場合は翌日）
入館料/一般・高校生200円（160円）、小中学生100円（80円）
※（　）は30人以上の団体割引料金